

青澄會編

芭蕉選

青澄会編

芭蕉

白帝社

昭和四十四年二月二十日 印刷
昭和四十四年二月二十五日 発行

定 価 三〇〇円

編 者 青 澄 会

東京都千代田区神田神保町三丁目十三番地

発行者 奥 村 銀 松

東京都千代田区神田神保町三丁目十三番地

印刷者 白 帝 社 印刷 部

東京都千代田区神田神保町三丁目十三番地

発 行 所

白 帝 社

電話二六一局四三五六番
振替 東京 一四六一〇六

凡 例

一、本書は、大学用の教科書として編纂した。

一、本書は、芭蕉の作品とそれに関連した資料のうち、教授上必要と思われるものを選択し、発句・連句篇、俳文篇に分ち、体系的に排列した。且つまた、附録としては、芭蕉略年譜・奥の細道地図を収録して、教授上の便をはかつた。

一、書中、各篇の冒頭に中扉を設け、その裏面に解説を附した。

一、学習上の便益を計り、頭注・脚注を加えると共に、書き込み等の余白を取るようにした。

一、定価の低廉を意図するほか、紙質・体裁等を、十分吟味し、永く保存に耐えるようにした。

一、本書の編纂には、阿部喜三男・井浦芳信・志田延義・西垣脩・広田二郎・吉田義雄の六会友が当つた。

目次

發句・連句篇	一
發句・連句篇解説	二
發句百句選	三
連句	三
冬の日(木枯の巻)	三
猿蓑(鷲の羽の巻)	三〇
炭俵(梅が香の巻)	三〇
付合に関する参考資料	三〇
(一) 法式論	三〇
(二) 付合論	三三
(三) 付句評論	三六
俳文篇	三七
奥の細道(全文)	一六
幻住庵記	一六
参考	一〇
一、芭蕉翁真蹟拾遺	一〇
二、米沢家藏真蹟	一三
三、芭蕉文考	一七
四、去来宛芭蕉書簡	二三
録	一四
芭蕉略年譜	一四
奥の細道地図	一六

雲と―芭蕉翁全伝「東武に赴く時、友だちの許へ留別」。

内裏難―本「大裏難」。謡曲「杜若」。「仁明天皇の御宇かとよ」。

見渡せば―「眺む」。本「詠」。謡曲「忠度」。「抑も此の須磨の浦と申すは、淋しき故に其の名を得る」。

秋なりけりとかや。此の浦の実は秋なりけりとかや。此の浦の秋なりけりとかや。此の浦の秋なりけりとかや。

心匠(こころたくみ)の拙きをし。出づべきものをとおもふぞ我が心匠(こころたくみ)の拙きをし。

秋なりけり。―は源氏物語「須磨のことば」。奥の細道「種の浜」。

枯枝に―「鶯野以下「鳥のとまりけり」の推蔽の形を掲げる。鶯野では仲秋の部に置かれているので、「秋の暮」が秋夕の意として、秋の暮が知られる。

芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉。芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉。

芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉。芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉。

芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉。芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉。

芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉。芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉。

芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉。芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉。

芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉。芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉。

芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉。芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉。

芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉。芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉。

芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉。芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉。

芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉。芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉。

芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉。芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉。

発句百句選

発句百句選

雲とへだつ友かや雁の生き別れ

内裏難人形天皇の御宇とかや

見渡せば眺れば見れば須磨の秋

枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮

月をわび、身をわび、拙きをわびて、わぶと答へむとす

れど、問ふ人もなし。なほわびく

芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉

茅舎の感

芭蕉野分して盟に雨を聞夜哉

冬爾一路。寛文十二年。

江戸広小路。延宝六年以前。

芝罘。延宝六年ころ。

東日記。延宝八年ころ。

武蔵曲。延宝九年(天和元年)。

武蔵曲。同年。

発句・連句篇

深川―夢三年。「寒夜辞」。

深川冬夜の感

四

手づから―和漢文操「張笠銘并序」
世にふるも新撰「秋波」(つくば)
集、其の比(応仁の乱のころ)
信濃にて、宗祇「世にふるもさ
らに時雨のやどり哉」宗祇の
老葉注「世にふるもさるるもさ
るるまきの屋にやすくも過ぐる
むら時雨かな」新古今、千五百
番歌合、二条院讃岐の歌、虚
栗、冬の部、時雨の句。

櫓の声波をうつて陽氷る夜やなみだ
手づから雨のわび笠をはりて
世にふるもさらに宗祇のやどり哉

穂屋―玉葉集、雜、金刺盛久「尾花
ふく穂屋のめぐりの山一むらにし
抄、七、信濃野のはやの薄に雪
ちりて、七月の御射山(みさ
やま)祭の時、すすきを刈つて
ふく飯屋有徳海、文章の序「雪
ちるやほやの薄としはれ果てた
る風情」。

信濃路を過るに

雪ちるや穂屋の薄の刈残し

江上の破屋―芭蕉庵。
眼前―甲子吟行「馬上吟」。

貞享甲子秋八月、江上の破屋を出づる程、風の声そゞろ寒
げなり。

野さらしを心に風のしむ身かな

杜牧が早行の残夢―杜牧の早行詩
「垂簾信(まかせ)て馬行、数
里未(こ)鶏鳴(こ)林下帯(こ)殘夢、葉飛
忽驚(こ)。杜牧は晩唐の詩人。

眼前

道のべの木樁は馬に喰はれ盡

武藏曲・夢三年。
天和元年。

虚栗。
天和元・二年。

猿蓑。
貞享元年初冬か。

野(の)紀行(甲子吟
行)。
貞享元年。

同前。

小夜の中山―静岡県小笠(おがさ)津原(いはら)両郡の境にある坂路。

閑人の茅舎―笈日記、伊勢部に「盧牧亭」。

北堂の萱草―毛詩「焉(いづく)得萱草言(こと)樹之(こ)背」。背は北堂、母の居るところ。芭蕉の母は天和三年没。兄―松尾半左衛門。老い一本「老ひ」。

不破―奈良時代の三関の一。鼓草県不破郡関ケ原町松尾に関所址がある。

秋風や―新古今集、良経「人住まぬ不破の関屋の板庇荒れにし後にはた秋の風」。「皇も」の中句末で切れる。

浜のかた―桑名の浜。木因の松下文集、句商人「海上に遊ぶ日は、手づから始をひろうてしら魚をすくふ道遙船にあまりて地藏堂に書衣」としてこの句の初句を「雪薄し」として掲げる。

しら魚―芭蕉句集講義に、桑名では白魚について「冬一寸春二寸」というとある。

杜牧が早行の残夢、小夜の中山に至りて忽ち驚く。
馬に寝て残夢月遠し茶の煙

同前。

閑人の茅舎をとひて

薦植ゑて竹四五本のあらし哉

同前。
貞享二年。

北堂の萱草も霜枯れ果てて、今は跡だになし。何事も昔に替りて、はらからの髪白く、眉皺寄りて、只命有りてとのみ言ひて言葉はなきに、兄の守り袋をほどきて、「母の白髪拌めよ、浦島の子が玉手箱、汝が肩もや、老いたり」と、しばらく泣きて、

手にとらば消えん涙そあつき秋の霜

同前。

不破

秋風や藪も皇も不破の関

同前。

草の枕に寝あきて、まだほの暗き中に、浜のかたへ出でて、曙やしら魚白き事一寸

同前。

草枕―名古屋の抱月亭に宿泊しての句か。

草枕犬も時雨る、か夜の声

同前。

海辺に日暮らして―熱田鍛冶物語に「尾張の国あつたにまかりける比、人々師走の海みんとて船さしけるに」(笈日記、雲水部、尾州熱田連中の「悼芭蕉翁」)に「やみに舟をうかべて浪の音をなぐさむれば」。

海暮れて鴨の声ほのかに白し

同前。

爰―此処。

爰に草鞋をととき、かしこに杖をすてて、旅寝ながらに年の暮れければ、

年暮れぬ笠きて草鞋はきながら

同前。

大津に―伏見を経て。

山路来て―鍛冶物語・笈日記によれば、熱田白鳥山で得た「何とはなしになにやらゆかし葦草」からの改作充當。

大津に出づる道、山路を越えて

山路来て何やらゆかしすみれ草

同前。

湖水眺望―大津の千那亭での吟であらう(千那宛書簡など)。千那の脇「山はさくらをしほる春雨」より見ても、屋の景の句とすべきか。「にて」留の景の句とす。芭蕉が「予が方寸に分別なし」(中略)只眼前なるは」とした(雑談集)。

湖水の眺望

辛崎の松は花よりおほろにて

笈日記に「野中の日影」と前書。蝶夢の芭蕉翁発句集に「貞享二年の部に収載、その根拠不明。貞享二年。野晒紀行。

山家―甲子吟行「山中」。郡内谷村
(やむら)の高山藥場などのもと
か。師走義「甲斐はむかしより
牧の駒多し。所謂甲斐の黒駒と
ど云伝る是也。所がら故行駒と
は置なり。それさへも時分なれ
ば麦秋に立止る也。」着くまでの
間の途中の状況。

古池や―應校(西吟、貞享三年三
月下旬刊)に中七「蛙飛んだる」
が初案か。
名月や―統虚栗に前書「草庵の月
見」。維談集によれば、其角らが
芭蕉を誘って舟遊に出る前に成
った句ということになるう。
酒飲めば―本朝文鑑の芭蕉の文に
「閑居の簾」と題する。

草庵―芭蕉庵。

花の雲―末若葉「観音の臺見やり
つ花の雲」をこの句の前年の吟
とし、両者を一聯二句の格であ
るとしてある。

露沾―磐城平の城主内藤風虎(義
泰)の子、義英。露沾は号。宗
因門。若くして閑居し、風雅に
遊んだ。享保十八没。年七十九。
五月雨に―三冊子「詞にはいかい
なし。浮巢を見に行かんと云所
俳也。」

甲斐の国山家に立ち寄りて

行く駒の麦に慰むやどりかな

古池や蛙飛びこむ水の音

名月や池をめぐりて夜もすがら

深川雪夜

酒飲めばいと寝られぬ夜の雪

草庵

花の雲 鐘は上野か浅草か

露沾公に申侍る

五月雨に鳩の浮巢を見に行かむ

発句百句選

七

同前。
同年四月。

蛙合・春の日。
天和元又は二年の
改めた(芭蕉俳句
の解釈と鑑賞)。

孤松。
貞享三年(又は二
年)の句(芭蕉俳句
の解釈と鑑賞)。

勦進藤・葛の松原。
貞享三年か。

統虚栗・詠草。
貞享四年か。

笈日記。
貞享四年。

枯芝や「春立（つ）てまだ九日の
野山哉」と並んで二句「初春」
故郷滞在中の作の一つ。

阿波の庄―阿山郡阿波村。

俊乗上人―俊乗坊重源、平安末鎌
倉初の僧。源空に師事し、入宋
建したのち、東大寺大仏殿を再
建した。建永元年寂。建仁二年
八十二歳の時、新大仏寺（神龍
寺）を建立した。

蓮台・獅子の座―これは同一物に
ついていう（新大仏寺誌）。

双林―娑羅双樹の林。釈尊がそ
林で入滅した時、枯れて白く変
じたという。

丈六に―「陽炎に（又への）佛つく
れ石の上」が初案だったらしく
（芥冊子・芭蕉翁全伝）。

代の仏の御丈の丈六の高さにの
意、語でたのは三月に入ってか
らであつた（全伝）。

伊勢山田―もう一句「裸にはまだ
衣更着の嵐哉」を統けてあり、
真蹟には「この两句に」いせに詣
で、西上人のなみだのあとを詣
したひ、増賀聖のむかしをおも
ひて」と前置きしている。
何の木―西行「何事のおほしま
すをば知らねどもかたじけなさ
の涙こぼるる」（家集）。紀行の少

枯芝やや、かげろふの一二寸

伊賀の国阿波の庄といふ所に俊乗上人の旧跡有り。護峰山
新大仏寺とかや云ふ、名ばかりは千歳の形見となりて、伽藍
は破れて礎を残し、坊舎は絶えて田畑と名の替り、丈六
の尊像は苔の縁に埋れて、御ぐしのみ現前とをがまれさせ
給ふに、聖人の御影はいまだ全くおはしまし侍るぞ、其の
代の名残うたがふ所なく、泪こぼる、斗也。石の蓮台・獅
子の座などは、蓬葎の上に堆く、双林の枯れたる跡も、ま
のあたりにこそ覚えられけり。

丈六にかげろふ高し石の上

同前。

伊勢山田

何の木の花とはしらず句哉

同前。

貞筈の小文。
貞享五年。

し後文に「神垣のうち梅一木もなし」云々。春雑の句とすべきである。

草臥れて「猿雖宛書簡により、初

頃め八木での「ほととぎす宿か、

あつたことが知られる。夏の句で

初瀬・泊瀬などとも書く。今は

「はせ」という。山腹に長谷寺が

あり、初瀬詣でや堂籠りのこと

は源氏・枕などにも見える。芭

蕉・万菊の初瀬観音堂参籠は三

月下旬初めごろの見当。大

葛城山「今」かつらぎやま。大

和・河内の国境にある。大

猶みたし「最初四月中旬初めに成

一言主（ひとことぬし）の神は客

貌が醜いので、役（えん）の行は客

が鬼神を使つて葛城・金峰へき

んぶの間に岩橋をかけたとい

夜だけ出で橋作りに従つたとい

われるが「人の口さがなく」

あるは「いかなる人の悪口に

や、なき名といふかしくおもひ

疑て」として詠んだもの。龍

門の滝。龍門は、龍門嶽の麓、龍

草尾村「平尾村の誤。平尾村は詠

曲「二人静」の葉摘川に近い。

草臥^{くたび}れて宿かる比や藤の花

初瀬

春の夜や籠^{こも}り人ゆかし堂の隅

葛城^{あま}城^き山^{やま}

猶みたし花に明け行く神の顔

龍門^{りゅうもん}へ越ス道也

雲雀より空にやすらふ峠哉

大和国草尾村にて

花の陰謡に似たる旅ねかな

同前。

同前。

同前。

同前。

龍門^{りゅうもん}貞享五年。

花の陰―笈の小文には「爾にて酒

くむかけやちる夜」の句があり、
「然らば草なくと誹語の飄はれぬべきことを」といつている

高野―高野山。枇杷隨筆に見える

前文に「(前略) 骨堂のあたり

に、イで、債おもふやうあり。此処はおほくの人のかたみの集れる所にして、わが先祖の

鬢髪をはじめ、したしきなつか

きおもひをこめつれと、袂もせ

きあへず、そゝろにこほる、涙

をとどめて」とする

ち、は、の―玉葉集、十九、釈教、

行基「山鳥のはろく」と鳴く声

きけば父かとぞ思ふ母かとぞ思

ふ」(夫木抄にも)。灌仏の日―四月八日の釈迦降誕会

(こうたんえ)。誕生仏に甘茶を

そそぐ。生れあふ―曠野、前書「奈良にて」、

中句「生れ逢ふ」。

招提寺―唐招提寺。天平宝字三年

(七五九)鑑真的創建、奈良西郊。

南都七大寺の一。鑑真は聖武天

皇の時の帰化僧。天平勝宝六年

唐から日本に來た。難航六回に

及んで失明。天平宝字七年五月

高野

ち、は、のしきりにこひし雉の声

灌仏の日は奈良にて爰かしこ詣侍るに、鹿の子を産むを
見て、此日においてをかしければ、

灌仏の日に生れあふ鹿の子かな

笈の小文。曠野、
貞享五年。

招提寺鑑真和尚來朝の時、船中七十余度の難をしのぎた

まひ、御目のうち塩風吹き入りて、終に御目盲ひさせ給

ふ尊像を拜して、

若葉して御めの雫ぬくはばや

笈の小文。曠野、
貞享五年。

笈の小文。
貞享五年。

六日寂。年七十六。律宗の祖。
その像は今も開山堂に安置され
ている。

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

同前。

蛸壺や四月二十日ごろの作。

此境はひわたるほど源氏物語、
須磨一明石の浦はたゞはひわた
るほどなれば。

此境はひわたるほどいへるものゝ事にや

かたつぶり右の「蛸壺や」の句
と大体同時同処の作

かたつぶり角ふりわけよ須磨明石

猿蓑。
貞享五年。

鶺鴒も一蹶野、前書「おなじ所に
て。五月の岐阜滞留中、長良川

鶺鴒も通り過る程に帰るとて

の鶺鴒を見た時の作。

面白てやがてかなしき鶺鴒ぶね哉

面白て一蹶野「おもしろうて」。謡
曲「鶺鴒」を想起したものであ
ろう。

笈日記・蹶野。
貞享五年五月。

河辺眺望一十八巻ノ記（賀島陽歩の
長良河畔の水楼におけるもの

河辺眺望

此あたり目に見ゆる物はみなすゞし

昔所掲の句。右の「面白うて」
の句と同時期の作。

蹶野後集・笈日記。
今日の昔。
貞享五年。

棧一木曾のかけはし。歌にかけち。
かけみちとも歌まれている。命

棧やいのちをからむつたかつら

は葛かずらの命。

姨捨山

姨捨山一男が妻の勧めに従つて親
代わりの姨を山に置いて帰つた

姨捨山

倂や姨ひとりなく月の友

ないで「我が心慰めかねつ更科
や姨捨山に照る月を見て」と口
ずさみ、翌朝姨を連れ帰つたと

同前。

更科紀行。
貞享五年八月。

同前。

伊達衣・其木枯。
元祿二年二月。

炭俵・続五論
元祿二年初案
元祿六年改案

木葉集
元祿二年十一月

猿蓑・猿舞師・卯辰集・けふの昔元祿二年

發句百句選

悲願前書「あつかりて夏も過
初冬をむかへて秋もくれて 山家に
序一只誹諧に魂の入たらむにこ
越せしける 我翁行脚のころ、伊賀
着せしける 山中の神を入たまひを
れば、たちまち断腸のおもひを
叫びけむ。あたしに纏るべき集を
くりたて、これを元にしつゝ、
れける。」

かくれけり―蓮の実、「草津にて、
のがれけり師走の海の鵲」カイツブリ

鷹を着て一卯辰集、前書「湖水のはとりに春を迎へて」真蹟には、「元祿三年旦、みやちかきあたり」としをむかへて」と前書。芭蕉句選には「たれ人かこも着て」元祿三年四月十日附此筋。千川宛芭蕉書簡にこの句につき、「五百年来昔西行の撰抄に多くの乞食をあるげられ候。愚僧故能人見おさむ悲しに二たひ西上人におさむかへしたる迄に御座候。」都ちかき所は臆所

四方より―白馬には芭蕉の俳文「洒落堂記」があり、その終りにこの句を添える。下五―には

かくれけり師走の海のかいつぶり

都ちかき所にとしをとりて

薦を着て誰人います花のはる

四方より花吹入て鴉の海

先^マたのむ椎の木も有^{あり}夏木立

色杉原・新花鳥。
元祿二年（または
三年か）。

其袋・卯辰集・花
摘・かくれさと
元祿三年。

卯辰集。
元祿三年。

猿蓑・卯辰集
元祿三年